

『ワインズバーグ・オハイオ』における 女性達の抑圧と自己表現について

倉 橋 洋 子

Women's Oppression and Self-expression in *Winesburg, Ohio*

Yoko Kurahashi

序

シャーウッド・アンドスン(Sherwood Anderson)の『ワインズバーグ・オハイオ』(*Winesburg, Ohio* 1919)は、二十世紀初頭の近代工業化の影響を受け始めたが、精神的には十九世紀の要素のまだ多分に残る、アメリカ中西部、オハイオ州の小さな因習的な町に住む人間を描いている。『ワインズバーグ・オハイオ』の構成は、作品の大部分に登場する少年、ジョージ・ウィラード(George Willard)の大人への成長の物語を縦軸として、町の人々の様子を横軸としている。アンドスは意図的にこのような構成にしたと思われるが、少年の成長そのものよりも、周囲の人間の姿に作者の意図が表れていると考えられる。

『ワインズバーグ・オハイオ』が今日も読み継がれてきたのは、過渡期において苦悩する人間の姿が、描かれているからであろう。アンドスが描く人間は、おおむね時代に取り残され、孤独で、健全とは言い難く、病的に歪んでいる。これは男性の登場人物よりも、女性の登場人物に顕著な特徴であろう。アンドスの描いた女性に関する代表的な研究を大別すると、女性達の変革を認めたものと、女性達の沈黙、伝統的な役割への束縛を認めたものになる。前者の研究として、Nancy Bungeは、「アンドスの小説は、大半の女性が男性をひたすら愛する代わりに、男性の支配を心に決め、男女の関係を犠牲にしても自己のエゴを守ることを学習したことを認識している」と述べている。例えば、『ワインズバーグ・オハイオ』の「品位」("Respectability")におけるウオッシュ・ウイリアムズ(Wash Williams)の妻の裏切りは、健全な男女の関係を破壊した、と解釈されている¹⁾。後者の研究として、Marilyn Judith Atlasは、『ワインズバーグ・オハイオ』の女性が伝統的なわな(trap)に捕われ、自己を社会や周囲の者の犠牲者と認識し、男性が決定権を持ち、女性は沈黙を守り、要求をしないことにより報いを受けている、と述べている。しかし、女性に対する態度は変えられなければならないとアン

ダスンが認識している、とAtlasは指摘している²⁾。Clare Colquittは、この作品を心理学的には「作家の力強い母親像との避けがたい関係と、別離に関する、即ち、作家の母親の愛の経験に関する話である」と見なせる³⁾と述べている。具体的には、母親の犠牲が作品の女性の描写に出ていることが指摘されている⁴⁾。また、William V. Millerもアングダスンが自己の母親のイメージを作品に投影させ、彼の描く女性達は役割に縛られ、成長がないと解釈している⁵⁾。これらの研究を参考にしつつ、以下所見を述べたい。

『ワインズバーグ・オハイオ』の人物像を理解する手掛かりとして、やはり最初の短編、「グロテスクの書」(“The Book of the Grotesque”)が有効と考えられる。そこではグロテスクについて次のように語られている。

It was the truths that made the people grotesques. The old man had quite an elaborate theory concerning the matter. It was his notion that the moment one of the people took one of the truths to himself, called it his truth, and tried to live his life by it, he became a grotesque and the truth he embraced became a falsehood.⁶⁾

ここで語られているグロテスクとは外見上、肉体上の特質というよりもむしろ、精神的な特質である。グロテスクな人間になる動機をWelford Dunaway Taylorは、「利己的」(selfish)と述べている⁷⁾。しかし、人間をグロテスクにした「自分の真理」(“his truth”)とは、生きる指針、目的、規範であろう。「真理のうちの一つを手に入れ、それを自分の真理とし、それに従って生きようとし始めると途端に、グロテスクな姿になる」、とアングダスンは語っている。これは即ち、「自分の真理」に従って生き始めようとした途端に、それぞれの理由により抑圧が生じ、不自然なグロテスクな姿になり、その姿が利己的であると考えられる。本稿では、エリザベス・ウィラード(Elizabeth Willard)、アリス・ハインドマン(Alice Hindman)、ケイト・スイフト(Kate Swift)、ルーイーズ・ベントリイ(Louise Bentley)を取り上げ、彼女達の「真理」に視点を置き、過渡期におけるアングダスンの女性達の人物像を時代背景を考慮に入れ考察する。

I

『ワインズバーグ・オハイオ』の縦軸を構成する少年、ジョージ・ウィラードの母親であるエリザベス・ウィラードに関しては、「母親」(“Mother”)と「死」(“Death”)において描かれている。彼女は所有権が彼女にあるホテルの主人の妻であるが、夫のトム・ウィラード(Tom Willard)との結婚を望んだわけではなく、一般的な世間の娘と同様に結婚に憧れていたのである。明白な結婚観を持たずに結婚した彼女は、一般的な娘と同様に未成熟であったと思われる。その結果、数年来、彼女は夫個人というよりも、夫がその一部である何かを憎んできた。

それは、結婚によって、彼女の若い頃の「人生の真の冒険者」(a real adventurer in life) (273) になろうとする夢が打ち砕かれ、彼女は自己を「無意味なくならない人間」(a meaningless drab figure) (26) と認識するようになったためであろう。彼女が憎んでいる何かとは、彼女自身は明確な自覚をしていないが、そのような結婚を当然とする社会であろう。彼女が客に姿を見られることを恐れているのも、彼女にとって、夫は社会の一部であるが、自己は社会の一部との認識がないためである。このような十九世紀的な精神に囚われている彼女が、ホテルの所有者としての立場や父親の残した遺産を利用して、不満足な現実を打開することは思いもよらぬことであろう。

夫と意志疎通を計ることができないエリザベス・ウイラードは、彼女の「少女時代の夢」(a girlhood dream) (25) である、冒険の夢を暗黙のうちに息子と共有する。彼女は、自らは半ば諦めてしまった自己の夢の再現を息子のなかに望んでいる。自らが夢を実現することを断念し、他者にそれを期待する彼女の生き方は、自立した女性のそれとはかけ離れている。そのような彼女ではあるが、リーフィ医師 (Doctor Reefy) にだけは “I wanted to run away from everything but I wanted to run towards something too.” (278) と彼女の内面を語る。彼女は現実のあらゆるものから解放され、若い頃の冒険に向かって走っていきたいと望んでいるのである。彼女が取りつかれたようにリーフィ医師に冒険の夢を語る時、彼女は少女時代に戻ったようであるが、他の時は生きる屍である。冒険の夢は、彼女の心の拠り所である「真理」であり、それにすがらねば彼女は生きていけないのである。

「冒険」(“Adventure”) のアリス・ハインドマン (Alice Hindman) も夢にすがって生きている。彼女はネッド・カリイ (Ned Currie) という恋人に去られた後も、“I am his wife and shall remain his wife whether he comes back or not” (127) という非現実な夢に縛られ、それを頼りに生きている。このような非現実な夢が、彼女の「真理」といえるだろう。彼女は “the growing modern idea of a woman's owning herself and giving and taking for her own ends in life” (127) という、現代的なものの考え方を理解できない。アリスは自分の決めた「真理」から抜け出すことも、抜け出したいとも思わず、それに自らを封じ込めている。彼女もエリザベス・ウイラードと同様に十九世紀的精神の持ち主である。新しい価値観を持ってない彼女は、現実を打開することもできず、現実を回避し、彼女の「真理」にすぎる他、生きる術はないのである。

「手」(“Hands”) のウイング・ビドルボーム (Wing Biddlebaum) も夢にすがって、現実を生きている男性である。『ワインズバーグ・オハイオ』の時代は、まだ手工業が残っており、「手」においても、手で行われる莓つみの早さが競われる時代精神が描かれている。しかし、機械化は着実に進みつつある時代で、作品の中でも機械化を伺わせるピストン棒という言葉が比喩的な意味で、“The slender expressive fingers, ... became the piston rods of his machinery of expression.” (9) と使用されている。このような時代にあってウイング・ビドルボームは、

牧歌的な黄金時代を夢想し、唯一の話し相手である、ジョージ・ウイラードにその夢を語る。ウイング・ビドルボームは、教師をしていた若い頃から「夢想」(to dream) (12) を大切にし、子供達の頭に「夢」(dream) (13) を抱かせようと腐心した。「夢想」や「夢」は彼にとって、彼の生きる「真理」である。

このウイング・ビドルボームの「真理」であるところの夢は、時代の変化に耐えられない彼のささやかな抵抗であろう。また、彼は現在にアイデンティティを見いだすことができず、黄金時代にさかのぼる夢想をしなければ、現代を生きていけないのであろう。「真理」である夢は、疎外された人の生きていく上での心の拠り所である。ウイング・ビドルボームと、エリザベス・ウイラード、それにアリス・ハインドマンとの違いは、ウイング・ビドルボームが現代の社会や時代から逃避しようとしていることに対して、彼女達は個人の置かれた環境や状況から逃避しようとしていることである。男性の登場人物と女性の登場人物との差が、社会的レベルでの逃避と個人的なレベルでの逃避との差に表れている。彼女達の置かれた立場は、社会の改革にまで及んでいないのである。

「信仰」("Godliness") と「身をまかす」("Surrender") に主として描かれている、ルーイズ・ベントリイ (Louise Bentley) は、息子の誕生を望んでいた狂信的な父親の娘として誕生した。父親は少年の頃、小柄でほっそりしており、たくましい兄弟と異なり、農場での労働には不向きであり、「除け者の羊」(odd sheep) (59) だった。彼が長老教会の牧師になるつもりで家を離れたのも、「除け者の羊」という現実から逃避するためだったのであろう。彼は、自己のそのような少年時代の思いにもかかわらず、娘には愛情を注がなかった。それ故、ルーイズ・ベントリイは、経済的には恵まれていたが、望まれて誕生したわけではなかった。そのため彼女は、愛情に飢えていたにもかかわらず、愛情をつかむことができないでいた。ルーイズ・ベントリイが高校生時代に勉強に力を注いだのも、明確な目的があったわけではなく、ただ淋しさを紛らわすためと、他になすべきことがなかったからだ。孤独な彼女の勉強熱心さは、高校在学中に下宿していたハーディ家の娘達の愛情を得るためには役立たず、却って反感を抱かれるだけになった。それは、主人のアルバート・ハーディ (Albert Hardy) が、当時の多くの者たちと同様に、「学問」(learning) (91) にこれからの世代の希望はかかっていると認識し、ルーイズを自分の娘と比較して誉めるためである。

当時の中西部の大半の若い女性は、東部の大学に進学することもなく、「感心する娘」(nice) か、「感心しない娘」(not nice) (94) かのどちらかに分けられるだけであった。世間は教育問題には熱心であったが、女性の学問に対しては期待していなかった。アルバート・ハーディですら、自分の娘が思うようにならない場合には、"girls will be girls" (92) と自己を納得させていた。ハーディ家の娘達の学問に対する態度は特別ではなく標準的であった。ルーイズ・ベントリイはハーディ家の娘達と異なり、学問を通して「希望」をかなえることも可能であったかもしれないが、彼女にはそれほどの自覚がまだ出来上がっていなかった。彼女も自立して

いない女性達の一人である。愛情が、“the quality she had all her life been seeking in people” (93) であり、それが彼女の探し求めていた「真理」であろう。

次に、職業人としての役割の自覚と、内在する女性としての激情 (passion) (194) に葛藤する人物として、女性教師のケイト・スイフト (Kate Swift) が挙げられる。彼女は、峻烈なところがあり、「冷たく厳しい」(cold and stern) (189) 教師であると思われている。しかし、彼女の内面では、「悲しみと希望と情欲」(grief, hope, and desire) (191) が絶えず戦っている。そのような彼女は、“She was a teacher but she was also a woman” (194) と表現されている。職業意識から生じた情熱により、彼女はジョージ・ウイラードに作家として身を立てるための心構えを、機会を捕えては説明しておこうとする。彼に対する熱心さは、「男性に愛されたいという激しい欲望」(the passionate desire to be loved by a man) (194) と区別がつかなくなる程である。彼女は自己の内部に存在する「激しい欲望」と、「冷たく厳しい」教師との間で葛藤する。彼女の「真理」は、人生の導き手としての役割の意識であろう。ケイト・スイフトは女性としての欲望を抑圧するために自己の「真理」にすぎる人物である。

ケイト・スイフトの「真理」は、社会的役割を認識した自立した女性の意志であり、牧師のカーティス・ハートマン (Curtis Hartman) の「真理」と根本的には同じである。カーティス・ハートマンは、外見は物静かであるが、熱心な牧師で、「神の言葉」(the word of God) (172) を町の大通りで説いて回りたい衝動に駆られながらも、それが出来ず、うつうつとしていた。そのような牧師に「肉欲」(carnal desire) (176) の衝動が襲ったのは、ケイト・スイフトがベッドに寝そべって、たばこをふかしながら、読書をしているのを窓から覗いてしまったからである。彼は「神のお告げ」(message) (173) を彼女に伝えたいと思う一方で、ベッドに横たわる彼女をもう一度見たいという欲望にかられる。そのような彼は、自己の内部に「神の力」(the power of God) (173) を増し、「肉欲」から救われたいと思う。彼は「神の力」を自己の「真理」として、「肉欲」と戦う人物である。ケイト・スイフトとカーティス・ハートマンは、個人の欲望よりも社会的役割を優先させたいと、自己の「真理」を生きる指針にしている人物達である。この点が先に述べた、エリザベス・ウイラード、アリス・ハインドマンそれにルーイーズ・ベントリイと異なる点である。

II

『ワインズバーグ・オハイオ』の女性達が、「真理」に従って生きようとするのは困難であるが、彼女達は何とか自己表現を試みる。エリザベス・ウイラードは、夫との生活において「真理」に従って生きていくこと、即ち、冒険の夢を実現することは不可能であると諦め、人生において敗北を認め、世間から姿を隠そうと自ら抑圧している。しかし、彼女は息子が冒険の夢、即ち、息子の場合は作家になろうとする夢をかなえることを望み、そのことを通して自己表現

を試みる。彼女の決意は固く、“Even though I die, I will in some way keep defeat from you” (26) と叫ばせる程のものである。これに関して Miller が “Kate Swift and Elizabeth Willard seek passionately to nurture the incipient artist in Geroge.”⁸⁾ と指摘している。彼女の夫が息子に忠告するのを聞いた時、彼女が激怒したのは、二人のやり取りが自然なものであったので、一瞬、自分が守ろうとしている息子を夫に奪われたと思ったためであろう。夫の存在は彼女にとって、夢を実現するという彼女の自己表現の直接的な抑圧であり、また息子を通して自己表現を試みようとするものの間接的な抑圧である。

このように抑圧されたエリザベス・ウイラードではあるが、彼女自ら自己表現を試みる場合もある。「同じ種類の解放」を求めているエリザベス・ウイラードとリーフィ医師 (Doctor Reefy) は、互いに理解しあえる間柄である。彼女は彼に若いころの夢や自己を語ることにより、解放への道を見だしかけている。リーフィ医師がエリザベス・ウイラードの言葉による自己表現について、“It is good for both her body and her mind, this talking” (276-7) と述べているように、彼女が夫や息子にも言葉で語ることをできないことを語っている時は、別人のように撥刺となる。一瞬、彼女は抑圧から解放されたかのようなようである。愛は一瞬でも障害とか、ノイローゼから逃避させ一種の充実感を味わわせる⁹⁾。そのような彼らの間柄は、プラトニックな愛から肉体的な愛にまで高まりかけていくが、第三者の思わぬ出現により現実に引き戻される。

アリス・ハインドマンは、かつての恋人、ネッドが帰ってこないかも知れないと予測しながらも、「彼の妻」としての「貞節」(loyalty) (131) を守り、その思いだけで生きている。彼女も『ワインズバーグ・オハイオ』の他の女性達と同様に孤独である。Atlas は、アリスが経済的に自立するが、恋人と共に生きることを望んでいると指摘している¹⁰⁾。彼女が貯金をするのは、「彼の妻」としての証の自己表現であり、そうしなくては不安が募りいたたまれないのである。しかし、彼女はネッドのあとを追うというような積極的な行動にはでない。彼女の自己表現には限界がある。アリスは経済的自立を精神的自立に結びつけることのできない人物である。そのような彼女が徐々に現実に目をむけ、非現実な夢から抜け出そうとはするが、ネッドに対する「貞節」が彼女を抑圧して他の男性と親しくできない。

しかし、彼女の内面では明らかに変化が起きつつあり、もはや「彼の妻」としての思いだけでは満足できない。彼女は、次に示すように愛情に飢えているのである。

Although she sometimes thought of Ned Currie, she no longer depended on him. Her desire had grown vague. She did not want Ned Currie or any other man. She wanted to be loved, to have something answer the call that was growing louder and louder within her.
(132)

アリス・ハインドマンがネッドにもはや頼らなくなったのは、彼女の成長の一步であろうが、

エリザベス・ウイラードがリーファイ医師の愛情を必要とした以上に、アリス・ハインドマンは愛情を必要としていた。「貞節」に抑圧されてはいたが、ウイル・ハーレイ (Will Hurley) と彼女が付き合うようになったのも、愛情を求める彼女の自己表現である。

雨の日に、アリス・ハインドマンが突然裸で庭へ飛び出したのは、彼女の積極的な自己表現で、結果的には、此れ迄の彼女からの脱皮となる。彼女は、此れ迄の衣を脱ぎ捨て、即ち、自己の「真理」を捨て、誰でもいいから愛情を分かち合いたかったのであろう。彼女の抑圧が強く、長年にも渡るがゆえに、彼女の自己表現の方法が、一層グロテスクなものになっている。しかし、歩道を歩いていたのは、耳の遠い老人であったので彼女の呼びかける声は聞こえなかった。相手にされなかったことは、彼女にとって大きな心理的変化のきっかけとなる。彼女は、勇敢にも自己を “the fact that many people must live and die alone, even in Winesburg” (134) に直面させようと試み始めるのである。

愛情を求めているワインズバーグのもう一人の女性は、ルーイズ・ベントリイである。彼女の自己表現は、ワインズバーグの高校で、先生の質問に全部答えることに示されている。彼女がそうするのは「よく思ってもらいたいためである」。(her eagerness to appear well) (90) しかし、それがうまくいかないとわかると、彼女は下宿先の息子のジョン・ハーディ (John Hardy) に手紙を書いて近づこうとする。それもプラトニックな愛情を求める彼女の自己表現であるが、彼の恋人になることを望んでいると彼に誤解される。その後二人は結婚に至るが、二人の結婚がうまくいかないのは、彼女が正確に自己表現できないまま、ジョンの「男女の愛の自己流の観念」(his own notions of love between men and women) (100) を受け入れた彼女の未熟さに第一の原因がある。結婚後も彼女は夫に、手紙を書いた時期の精神的に満たされていない空虚さ、愛の渴望を言葉で伝えようとするがうまくいかない。男性と女性において、相手に求める愛の違いがここに示されている。

ルーイズが夫に、男の赤ん坊の世話をしないことを責められた時に、“It is a man child and will get what it wants anyway” と鋭く言い放ち、“Had it been a woman child there is nothing in the world not have done for it.” と言う。(101) この彼女の言葉に、女として生まれ、その誕生すら望まれず、愛情の欠如を味わい、彼女なりに愛情を求めて自己表現するが、うまく伝わらず断念してしまい抑圧されたルーイズの感情が表現されている。彼女の抑圧は、“a man child” に生まれず、“a woman child” に生まれたことに始まっている。しかし、夫にこのような彼女の抑圧された感情を述べることも、彼女の自己表現ではある。

ケイト・スイフトの自己表現は、生徒に彼女が話をする時の生き生きとした表情に表れている。そのように彼女が幸福そうにしている時は、人生の役割としての彼女の「真理」を追究している時であろう。しかし、夜半ばまで外を一人で歩くことも、彼女の一種の自己表現で、彼女の内面の「女」としての「激しい渴望」を「教師」としての意識が抑圧しようとする行動である。一度彼女が雨の夜、外で六時間も過ごして戻ってきた時、母親が “I am glad you're not

a man.” (191) と言う。母親の意識の中には、男はそのような行動をするだろうが、女はしないだろうし、して欲しくないという固定概念があると考えられる。母親が、ケイト・スイフトの内面の葛藤を理解するのは困難である。

エリザベス・ウイラードと同様に、ケイト・スイフトはジョージ・ウイラードを芸術家として育てようとする。これもケイト・スイフトが自己の「真理」に従って行動しようとする自己表現の表れである。しかし、この行動は、彼女の内部の「女」としての「激しい渴望」の表出と、ジョージ・ウイラードの彼女に対する一面的な捕え方でグロテスクに終わる。ジョージ・ウイラードは、彼女の熱心な話振りを以前から理解できなく、“she might be in love with him” (185) と思っていたからである。彼は、彼女の人生の導き手としての意識を理解できない。Colquitt は、「ワインズバーグの男性達は、女性の表現欲を性的な関係においてのみ、明らかにし、利用し、理解している」と述べている¹¹⁾。しかし、ジョン・ハーディが、ルーイズ・ベントリーの愛の渴望を肉体的なものとして誤解したように、ジョージ・ウイラードもケイト・スイフトの人生の導き手としての激しい意識を誤解する。アングスンは、男性が女性の多面的な心理状態を一面的にしか捕えられないことを表現していると考えられる。

III

『ワインズバーグ・オハイオ』の女性達は自己表現を試みるが、抑圧されているため、誤解され、その結果はグロテスクになる。彼女達が現実の状況から抜け出すことは、困難である。エリザベス・ウイラードは結婚前夜に、父親からワインズバーグの者とは結婚しないで、父親のお金をもって何処かへ行くように、そのお金が“a great open door” (275) になるかも知れないと言われる。父親は娘の人生を予知してこのような忠告をしたのであろう。しかし、保守的な彼女には父親ほどの進取的な精神もなく、ワインズバーグのトムと結婚し、そのお金を彼女の夢を果たすために使うこともなく、息子に残そうとした。父親の言いつけ通りに、夫にはそのお金のことを告げずに、彼女は漆喰の壁の中に隠した。しかし、彼女の意志に反して息子にもそのお金の在りかが伝わらず、閉じ込められたままになる。そのお金は、皮肉にも父親の意志に反して、解放されず、閉じ込められたエリザベス・ウイラードの人生を象徴しているようである。エリザベス・ウイラードには自らの人生を切り開くチャンスはあったが、彼女はそれを掴む方法がわからないまま死を迎えてしまう。彼女は現実から解放されたいと望んではいたが、現実から決別する勇気を持ち合わせていなかったのであろう。リーフィ医師の愛が一瞬、死が永遠に彼女を現実から解放したのみである。

アリス・ハインドマンは恋人の帰ってこないことに不安を抱きつつも、自己の夢に自らを閉じ込めて過ごしてきた。ただし、冒険の夢に囚われているエリザベス・ウイラードがその瞬間は幸福な気分になれるのに対して、アリス・ハインドマンは自己の夢に囚われている限り、不

安が絶えずつきまとう。エリザベス・ウイラードは現実を見つめ、そこから解放されたいために冒険の夢を描くが、アリス・ハインドマンは現実を直視していない。彼女が現状を打破するには、自己の夢から抜け出し、現実の孤独と対面することから始まる。小説は彼女がそこまで決心したところで終わっているが、読者には彼女が大きく飛躍するとは期待されない。

ルーイーズ・ベントリイは自己表現がうまくできないために、周囲の者に彼女の感情を理解してもらえず、誤解され、悪し様に言われているが、彼女自身も周囲の者の感情を理解しようとしていない。また、彼女は愛情を求めているが、彼女自身は夫にも子供にも愛情を注いでいるとは思われない。Taylor は、“Anderson felt as repelled by this sense of separateness as by the growing emphasis upon materialism and the corresponding decline in human values.”と指摘している。¹²⁾物質主義の台頭で人間の尊厳が失われ、人々は他者に関心を示さず、孤立するようになってきた。このことは Bunge の指摘する「女性達は自分のエゴを守ることを学習した」ということと関係がある。「エゴを守ること」を学習したのは、女性にも男性にも当てはまることで、人々はエゴを守る余り、他者の尊厳を忘れかけたのであろう。

ルーイーズ・ベントリイが特に、自分の子供の男の子と夫に愛情が示せないのは、彼女が女の子であるが故に愛情を注がれてこなかったことに、原因がある。一面では彼女は、そのように男子を尊重する時代の犠牲者であろうが、彼女が他者に愛情を注がない限り、彼女の求めている愛情も得られないであろう。彼女がこのことに気付いていない点において、彼女は他者に依存した女性といえるだろう。エリザベス・ウイラードもこの点に於ては同様で、彼女が夫を憎んでいるが、夫も彼女を憎んでいることに気付いているとは考えられない。人々はエゴを守り過ぎてしているとアンダソンはこの短編集で述べたかったのであろう。

ケイト・スイフトの「真理」は、他の三人の女性の「真理」が個人的なものに対して、社会的役割を意識したものである点が異なっていると既に述べたが、彼女の場合も他の女性達と同様に、他者の意志を多少無視した独善的な傾向がある。それがジョージ・ウイラードに彼女が彼に恋をしていると誤解される一因になったのであろう。しかし、ジョージ・ウイラードも、“I have missed something. I have missed something Kate Swift was trying to tell me”と曖昧ではあるが理解し始める。また、牧師のカーティス・ハートマンも、一方的にケイト・スイフトを“she is an instrument of God, bearing the message of truth”と解釈し、彼女は「肉欲」から彼を救い出し、彼の「真理」即ち、「神の力」を授ける人であると受け取る。(183) アンダソンは、ケイト・スイフトを他の受け身的な女性達と区別して、直接及び、間接的に他者に働き掛ける積極的な女性として描いていると考えられる。この点が、Miller が“she is one of Anderson's most memorable creations”と述べている根拠であろう。¹³⁾しかし、ケイト・スイフト自身は、ジョージ・ウイラードとの会談が予想外の結果に終わり、自己嫌悪に陥ったと思われる。

ワインズバーグの女性達は、いずれも精神的に社会や自己の枠に囚われ、そこから抜け出す

ことができない。また、Atlasが指摘しているように、ジョージ・ウイラードのみがワインズバーグを出るが、女性達は例外なくその地から抜け出すことができない。これは、ワインズバーグの女性達の精神的な囚われを象徴しているように思われる。¹⁴⁾しかし、よりよい人生を目指してさまざまな試みをしていることは明白である。「グロテスクの書」において、グロテスクな人間は全てが「醜いもの」(horrible)でもなく、なかには「面白いもの」(amusing)や、「美しいもの」(beautiful)もあり、老作家の心を痛ませるものもある、と述べられている。(3)老作家はグロテスクな人間に対して同情すら示している。アンダスンがこのような女性像を作り上げたのは、女性のまわりの環境を肯定しているのではなく、老作家と同様に、このようにしか生きられなかった女性に同情を示しているのであろう。

註

- 1) Nancy Bunge, "Women in Sherwood Anderson's Fiction," in *Critical Essays on Sherwood Anderson*, introd., David D. Anderson (Boston: G. K. Hall. & Company) p. 243.
- 2) Marilyn Judith Atlas, "Sherwood Anderson and the Women of Winesburg," in *Critical Essays on Sherwood Anderson*, pp. 250-64.
- 3) Clare Colquitt, "Motherlove in Two Narratives of Community: *Winesburg, Ohio* and *The Country of the Pointed Firs*," in *New Essays of Winesburg, Ohio*, ed., John W. Crowley (Cambridge University Press, 1990), p. 76.
- 4) Colquitt, p. 88.
- 5) William V. Miller, "Earth-Mothers, Succubi and Other Ectoplasmic Spirits: The Women in Sherwood Anderson's Short Stories," in *Critical Essays on Sherwood Anderson*, pp. 196-209.
- 6) Sherwood Anderson, *Winesburg, Ohio: A Group of Tales of Ohio Small Town Life* (B. W. Huebush, 1982), p. 5. 以下この作品からの引用は、本文中の括弧内に頁数のみ記す。
- 7) Welford Dunaway Taylor, *Sherwood Anderson* (Frederick Ungar Publishing Co., 1977), p. 24.
- 8) Miller, p. 205-6.
- 9) Miller, p. 207.
- 10) Atlas, p. 253.
- 11) Colquitt, p. 94.
- 12) Taylor, p. 2.
- 13) Miller, p. 206.
- 14) Atlas, p. 251.